

第1回カストゥボン植林ツアー報告

7月1～9日の9日間、カストゥボン（チボリ語で「一緒に働く」という意味）してきました！

サムラングの有機モデル農場に1泊、ゼネラルサントス市内に1泊後、サウスコタバト州へ移動。ラムフゴン村に4泊しながら、ラムフゴン村、バンカル村、エルクダ村郊外のはげ山に植林です。ミンダナオでは、植林に適した雨期は、5月下旬からです。このプログラムに参加している村民たちは、自分の土地への植林はもう済ましており、今回は村民と現地 NGO の PFP が共同で管理する共有地への植林です。

急斜面を苗木を持って上がり、シャベルで 40cm ほどの穴を掘り、苗木を入れて埋め、2m 横へ移動し、同じことを繰り返す。この単調で暑い作業も、村民たちと一緒になので楽しく行うことができました。ツアー参加者は、HANDS の新入会員今泉誠子さんと、立教大学4年生の橋本みずほさん。→

天に向かって木を植えた！

今泉誠子

急峻な斜面を空を見上げるようによじ登り、熱帯の陽が照りつけるなか、マンゴーなどの苗木を植えつける（実際には村の人に穴を開けてもらって植える、という、ロイヤルファミリーのお手植えという感じであったが）。等高線にそって芽を出すフラミンジャは、灌木にまで育てば、がけ崩れを防ぎ茎葉は肥料にできる。そして、このラインに沿ってさまざまな果樹の苗木が植えられた。このロハス山脈に 4～5 年たてばフルーツが実り始め、村人の収入に寄与できるだろう。まずは今回の植林地がモデルとなり、他の村々に拡大するだろう。だろう、だろうと言うのは、この試みはようやく始まったばかりだからだ。雨よ降れ、苗木よどうか枯れないで。



サムラングのモデル農場で田植えをする今泉さん

熱帯の森林といえば、皆様はどんな光景を想像されるだろうか。私はうっそうと茂るジャングル（密林）しか思い浮かばないが、今回訪れたミンダナオの山々は丸裸であった。裸の山には草のみが、刷毛でうすく緑に塗ったよう。とんでもない傾斜地にはコーンの畑が広がり、がけ崩れの痕が生々しく地肌をさらしたまま天まで続くかと思われる場所すらある。フィリピンは、1900 年には全土の 70%が森林で緑色に覆われていたが、1999 年には 18.3%までに減少した。そのわけのひとつには、日本などの外国資本により森林が伐採されたことがあげられる（そういえば安い外材が出回り、日本の木材は販路を失った。さらにそれが日本の森林破壊をも加速した）。加えて、山間に住む貧困にあえぐ人たちが、現金収入につながる木炭を作るために木々を切り倒すということも、こころならずもやっている、という。山に木がなければ雨水を保持する力が失われ土砂崩れや鉄砲水の原因となり、その被害は悲惨そのものである。そのうえ地下水も減少する結果、湧き水（泉）のもとも枯れる。生命維持に最低限必要な「みず」がなくなるのだ。このように貧困がさらなる貧困を誘引する。



スララ国立農業大学の学生と植林する今泉さん（右）エルクダ村で

アフリカやアジアで現在進行している砂漠化については、残念ながら「もはや手遅れ」と、私は悲観的である。しかし、フィリピンには希望がある。これらの植林の努力が実を結べばやがて森は回復するだろう。数 10 年かかるが。この旅で、その実感を得られたことが何より嬉しかった。ツアー参加者としてお伝えしたいことは山ほどあるが、すべて割愛させていただいた。しかし、同行 4 人のひととなりに接することが出来たことも、私に充足感を与えてくれるものとなった。ありがとう。